

あらいせいほうひつ しほんちゃくしよくかんおうかんぶうず びょうぶ
「新井晴峰筆 紙本著色観桜観楓図屏風」

青森県重宝（平成16年1月21日指定）

ろっきよくいつそう しほんちゃくしよく
六曲一双 紙本著色 各縦121.8cm 横299.8cm

本作は、弘前藩お抱え絵師、新井晴峰の作品です。弘前藩では、国許と江戸のそれぞれに絵師を置いており、新井家は江戸定府でした。晴峰は新井家の五代目で、長府藩毛利家のお抱え絵師の次男として生まれ、婿養子として新井家を継ぎました。彼が、師である狩野晴川院養信の一字を拝領して晴峰と号したのは、文化11年(1814)からです。本作は、晴峰の没年の天保9年(1838)までの間に描かれたこととなります。新井晴峰の作品は、弘前藩お抱え絵師としては比較的多く遺されていますが、本作は晴峰の作品として代表的なものであるばかりではなく、弘前藩主の御殿を飾っていた、失われた作品群の水準の高さを示す貴重な資料でもあります。

本作は、平成14年(2002)に弘前市立博物館に収蔵されました。それまでの来歴は不明で、現存する御道具目録類にも該当する記載は見つかっていません。ただ、縁金具が弘前藩主津軽家の替紋の一輪牡丹の意匠であることから、津軽家に関係する美術資料であることは確実に考えられます。弘前藩お抱え絵師の屏風作品にこれと同種の縁金具が使われている例は、筆者の管見の限りでは知られておらず、また、保存状態も良好で、調度として日常的に使用されていたと思われるものです。作者が晴峰と名乗った時期の祝い事としては、藩主の昇進、若殿と將軍の姪の結婚、藩主の娘の結婚などがあり、

本作は、それらの祝いの場を飾った屏風ではと想像するのもあながち的外れとは思われない、華麗な大画面の作品です。

題材は、春と秋を対比させた王朝風俗です。水の流れて左右の画面を一体的に繋ぎ、その繋ぎ目の部分(右隻4扇目～左隻2扇目)に中高に山を描き、寺や社をアクセントにして鑑賞者の視線を誘導します。中央の山から裾広がりに人物集団を配置して、左右両端の樹木と山と幔幕へと全体の構図はなだらかな波型を描いています。計算された安定感のある構図です。

右隻は、満開の桜が散る風情を愛でる若い公達(王朝の貴公子)が主人公です。右端の幔幕のしたで従者たちが覗き込んでいる木箱は、『石山寺縁起絵巻』などに見られる、御馳走を満載した荷唐櫃を思い出させます。古画の学習に熱心だった師の狩野晴川院に命じられて、晴峰も古画の模写に従事したことが知られています。この屏風の描写にも、精進の跡が伺えるようです。

左隻では、従者が公達に視箱を差し出しています。紅葉の歌を詠むにしては、公達を持った紙は大きく、書状のようにも見えます。公達の背後で、小童が草を結んでいる仕草が、「草結ぶ」「草枕」という言葉を連想させます。公達は旅の空で恋人を思っているのでしょうか。楽しい宴が始まりそうな右隻の春に対して、左隻はしみじみと人を恋う秋の風情です。

(三上幸子)



左隻



右隻